

2021 年度 森泰吉郎記念研究振興基金（研究者育成費）

研究成果報告書

研究課題名：日本に暮らすムスリム第二世代 ―青年期の葛藤の様相―

所属：政策・メディア研究科 後期博士課程 3 年

氏名：クレシ 好美

1. 研究の概要

日本に暮らすムスリム第二世代〔以下、第二世代〕の中には、複数の背景・多様な価値観のもとで葛藤し、「自分とは何者か」という青年期特有の課題に答えを見つけることに困難を感じる者がいる。そこで、第二世代とかれらを取り巻く学校・家庭・ムスリムコミュニティ関係者への質的調査を行い、かれらが青年期に経験する葛藤の様相を顕在化し、そこに家庭環境や学校生活の経験がどのような影響を及ぼすのか、どのようにイスラームと向き合い、何をきっかけに葛藤を乗り越えるのかを考察する。マイノリティの抱える問題と解決への指針が社会に共有されることで、生き難さを感じる第二世代が疎外感を払拭し、社会の一員として受け入れられ共に生きる方法を探りたい。

2. 今年度の研究活動

本研究には、当事者である第二世代への丁寧な聞き取りが必須であるが、これまで主にムスリムコミュニティに集う第二世代を中心に調査協力を依頼してきたため、調査データに偏りが生じていた。すなわち、ムスリムコミュニティ利用者の多くは、自身がムスリムであることに比較的迷いが少ない者あるいはすでに葛藤を乗り越えた者であり、そうしたコミュニティを敬遠する者の声を集めることは難しい。そこで今年度は、①自身がムスリムであることを肯定できずに悩む第二世代や、②すでにイスラームに従う生き方を放棄した第二世代の語りを集めるために、国内各地でのフィールドワークを行うこととした。

フィールドワーク先は調査協力者の生活圏であり、その調査協力者は、①インターネット上でアンケートを取って上記①や②の条件に合うと思われる者に依頼したほか、②これまでの調査協力者の中から条件に合う者に再度連絡を試み、③また知人の紹介といった伝手で新たな調査協力者を探し出した。フィールドワークの期間は 8 月から 12 月にかけて、関東・中部・関西・九州に住む第二世代 24 名とその親世代 3 名への聞き取りを行った。

3. 現時点での発見

家庭と学校で異なる役割を担い調整を図ろうとすることは、どの青少年にも起こりうることだが、第二世代の場合、イスラーム的価値観を優先した親からの圧力と、学校で抱く同化願望がどちらも強い場合に、両者の間で深く迷い悩む傾向がうかがえる。今回のフィールドワークにおける調査協力者の多くは、親からの過度な圧力に対する不満を語り、級友が当たり前に行っていることが許されず逆に級友の誰もしていないことを強要され、しかもそれに対する説明が十分に行われないことを嘆き、イスラームこそが周囲への同化を阻む障害だと考えている様子であった。また、それに対して周囲に理解者あるいは共感者がいないことが、かれらの葛藤をさらに深めていることもわかった。

調査協力者の中には、そうした困難な状況を克服して現時点では自身をムスリムとして自己定義できるようになった者もいるが、そのきっかけは親の圧力を離れたところでのイスラーム学習であったり、同じ悩みを抱える同世代の仲間との出会いであったりすることも改めて確認できた。

4. 進捗状況と今後の展望

今年度は第二世代の葛藤に関して、親子関係の視点から書いた論文「日本に暮らすムスリム第二世代 一当事者の語りから見える葛藤の様相一」が『KEIO SFC JOURNAL』21(1)に掲載され、学校現場での実態について書いた論文「日本に暮らすムスリム第二世代 一学校教育現場における実態の検証一」が『白山人類学』24に掲載予定である。

次年度は、今回のフィールドワークで得られた調査データをもとに、以下の2点に焦点を当てた分析を進める予定である。すなわち、^①自身がムスリムであることを肯定できずに悩む第二世代や、すでにイスラームに従う生き方を放棄した第二世代について、^②またそうしたイスラームへの否定的な姿勢を経た後にこれを肯定できるようになった者の葛藤克服のきっかけについて、分析し考察した成果を投稿論文にまとめたい。

5. 謝辞

森泰吉郎記念研究振興基金（研究者育成費）による資金提供を受けられたことで、移動費や宿泊費等の諸経費の心配をせずに遠方へのフィールドワークを行うことができました。今回新たに得られた調査データが、本研究の進捗に大いに役立ったことは言うまでもありません。本課題を採択してくださいましたことに、深く御礼申し上げます。